

SFC ディスカッションペーパー
SFC-DP 2012-005

大学学部教育における新しい3目標の提案

-日本語力、インテグリティ、向上心-

岡部光明

慶應義塾大学名誉教授

okabe@kvp.biglobe.ne.jp

2012年9月

大学学部教育における新しい3目標の提案*

—日本語力、インテグリティ、向上心—

岡部光明

【概要】

大学の主な役割は研究、教育、社会貢献にあるとされるが、究極的には高等教育にあるとってよい。それは学生に教養（基礎的人間力）を身に付けさせることを意味する。そうした教養は、論理系能力、伝達系能力、意欲系能力の3つの基礎能力であるとする見方が教育学研究者から提示されている。本稿では、それらの能力をより具体的に理解すれば、日本語力、インテグリティ、向上心の3つにまとめることができることをその論拠とともに主張した。

はじめに

大学は、世界中どの国においても社会において非常にユニークな機能を持つ組織体である。なぜなら、それは「研究」、「教育」、「社会貢献」という3つの役割を総合的に果たす機関であり、そうした機能をもつ組織は大学以外にないからである。ただ、これらの機能のうち教育（高等教育）こそがその核心に位置している、と考えることができる。なぜそう言えるのか。そして高等教育においてはどのようなことがらを教育目標にすべきか。さらに、そうした目標を最も効果的に達成するための条件は何なのか。本稿では、これらを順次考えることにしたい。

1. 大学の3つの役割と教育

大学の3つの機能（研究、教育、社会貢献）のうち、どの国あるいはどの時代においても、また制度がどう変化しても、教育面での任務こそがその究極的な役割である、と筆者は考えている。ここに大学という組織の最もユニークな面があると理解できる。

(1) 大学は世界で最も美しいところ

そのユニークさとともに、大学はこの世の中で最も美しいところである、と筆者は考えている。確かに大学のキャンパスは一般に広大で緑の豊かな場所にあるが、単にそのことを意味するのではない。そこはまさに高等教育の現場であるからだ。

*本稿は、近刊拙著『大学でほんとうに学ぶべきこと—ぶれない価値観と知的スキル—』の第2章を基礎としている。なお、本稿は明治学院大学『国際学研究』43号（2013年3月刊行）に掲載される予定である。

つまり、人が長い人生において最も成長でき成熟すべき時期（標準的には18歳から22歳）にある若者がそこに集まっている。その一方、人類の知識のフロンティアの拡張に挑む研究者がそうした若者に対して、単に知識を伝授するだけではなく、学生個人の根源的な能力を育み、そして人格の形成を図るといった高貴な任務を帯びた共同体になっているのが大学だからである。そこはまた、知識、知的スキル、知恵、そして各種価値観を現在の世代から次世代に引き継ぐという役割を何の利害関係もなく行える場所になっており、さらにその働きが基本的に人と人との深いつながりを基礎として行われるコミュニティという性格を持つからでもある。これに類する機能をもった組織は他には存在しない。

(2) 学生が身につけるべき4つの力量：近年における議論

まず、高等教育においては、何がその目標になるのだろうか。より具体的にいえば、大学生は、学部在籍の4年間において、何を学び、究極的にどのような力量を身につけるべきなのか。

これに関しては、ここ数年、文部科学省など様々な場において専門家による議論がなされ、その結果が取りまとめられている。例えば、文部科学省の報告書（2008）においては、大学生が共通して身につけるべき学習成果が「学士力」という表現によって規定されている（図表1）。具体的には

(1) 知識・理解（異文化理解等）、(2) 汎用的技能（コミュニケーションスキル等）、(3) 態度・志向性（自己管理能力等）、(4) 統合的な学習経験と創造的思考力（問題解決能力等）、の4分野（合計13項目）がそれに該当するとされている。

図表1 「学士力」の内容

<p>1. 知識・理解</p> <p>(1) 多文化・異文化に関する知識の理解</p> <p>(2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解</p> <p>2. 汎用的技能</p> <p>(1) コミュニケーション・スキル</p> <p>(2) 数量的スキル</p> <p>(3) 情報リテラシー</p> <p>(4) 論理的思考力</p> <p>(5) 問題解決力</p> <p>3. 態度・志向性</p> <p>(1) 自己管理能力</p> <p>(2) チームワーク、リーダーシップ</p> <p>(3) 倫理観</p> <p>(4) 市民としての社会的責任</p> <p>(5) 生涯学習力</p> <p>4. 統合的な学習経験と創造的思考力</p>
--

（出所）文部科学省（2008）。

一方、経済産業省の報告書（2006）においては（図表2）、直接大学教育の目標だと言及しているわけではないが、職場や地域社会の中で多くの人々と接触しながら仕事をしていくために必要な能力を「社会人基礎力」と名付け、人々がいきいきと活躍できる社会を創っていく上でこれが一つのカギになる、としている。そして、それは3つの力量、すなわち (1) 考え抜く力（シンキング）、(2) 前に踏み出す力（アクション）、(3) チームで働く力（チームワーク）、の3能力である（そしてそれらは合計12の要素から成る）としている。

図表2 「社会人基礎力」の内容

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じることもあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

(出所) 経済産業省 (2006)。

考え抜く力(シンキング)とは、課題を発見する力、課題解決策を編み出す力であり、前に踏み出す力(アクション)とは、実行力、他人に働きかける力である、と規定している。そしてチームで働く力(チームワーク)とは、社会が大勢の人間によって構成されるものであるから、伝達する力、状況を把握する力、規律性など、かなり多様な力量や習慣を意味する、と説明している。

これら2つの報告書においては、いずれも要請される各種の力量が網羅的に列挙されており、それらの項目自体、筆者としても何ら異存はない。ただ、このように数多い要素を取り上げれば、本当に重要な要素は何なのかについての焦点がぼやけてしまう感が否めない。また、経済産業省が提

示す社会人基礎力は、基本的に会社や組織において役に立つ人材の資質を述べているという印象がある。さらに、教育が目標とすることとしては、これらの他にもう少し深いこと、根源的なこともあるのではないかと、という感想を持つ。そして、大学教育の目標といっても、学部教育の場合と大学院での場合が区別されずに議論されているようにも見える。

上記の報告書等におけるこれらの問題点を念頭に置くならば、大学教育の目標は次のように理解し、整理できるのではないかと筆者は考えている。

(3) 学部教育の核心は「見る力」の養成

まず、大学の教育機能を大胆に特徴づけるならば、学部教育は現実を「見る力」に関わるものであり、大学院教育は現実を「変える力」に関わるものである（川本 2001）というのが一つの巧みな整理方法である。

大学院は、むしろ研究者の育成という大きな役割を持っている。それは自明なことである。しかし、例えば専門職大学院ないしプロフェッショナル・スクール、例えば経営学（ビジネス・スクール）、法律学（ロー・スクール）、医学（メディカル・スクール）などを想起すれば明らかなおお、これらはいずれも現実の社会ないし人体に関する具体的な問題を直接解決する専門的技量を学生に習得させることを大きな目標としていることが理解できる。こうした「現実を変える力」は、いうまでもなく「現実を的確に見る力」があってはじめて成立するものである。だから、専門職教育は、そのための基礎教育としての学部教育を経てはじめて入学を許可される大学院のレベルに置かれるのが当然のことになるわけである。

(4) 教養の重要性

では、「見る力」に関わる学部教育では、具体的にどのような力量の習得を目指すべきか。それこそまさに「教養」教育にほかならない、というのが筆者の考え方である。では教養とは何か。教養（がある）とは従来、知識が豊富なこと（物知り）と同義に使われることもあるが、現在その意味で使うことはもはや全く不適切になっている。なぜなら、インターネットが発達した現在、必要な情報や知識は、例えばインターネット上で情報検索ソフトウェアを用いて検索すれば、ピンポイントで、しかも瞬時に入手可能となっており、知識を人の頭の中に記憶しておくことを教養（がある）と見なすことは意味を持たなくなっているからである。

教養とは従来、英語ではリベラルアーツ（liberal arts）と称されているが、その場合、特定の専門領域の考え方に縛られることなく様々な知識を自由（liberal）に用いて問題を解決してゆく技量（arts）である、と考えるのが適当ではないか。つまり、何らか特定の分野に関することでないという点で「非専門的」、そして利益の有無に直接関係することでない点で「非実利的」な概念といえる（猪木 2009）。

そこで、現代における教養とは「目先の問題に対してすぐ直接的に役立つ技量ではなく一般性の

高い人間としての幅広い力である」と考えることにする。つまり、陳腐化が避けられない知識とは異なり、人生において長く役立つ素養、そこに教養の基本があると考えられるわけだ。すぐに役立つことは、概してすぐ役に立たなくなる。したがって、教わった知識を全部忘れてしまったときにその人に残るもの、それが教養だという理解である。それには様々な技量のほか、人間としての振る舞いの仕方や品性なども含まれることになるだろう。学生がそれを身につけることこそが教養であり、また大学の学部教育である、と考えたい。

(5) 教養を規定する4つの力量

では、人間の総合力としての「教養」は具体的にどのような内容を含むと考えるべきか。これまでの筆者の研究と体験を踏まえれば、教養とは、4つの基礎的な知的力量を意味しており、またそれを習得することである、と理解して良いのではないかと考える。すなわち、ものごとの道理が理解できるとともに的確に判断する力（理解力）、自分の理解や意見を相手に的確に伝える力（伝達力）、これらを常に高めることができる力（向上力）、そしてこれらの力を持って社会生活を営む力（社会力）、この4つである。

なお、大学教育よりも広い視点に立ち、社会に生きる人間として求められる力量とは何かという問題は、キー・コンピテンシー（中核的な力）という概念を軸にして近年国際的な研究が進められている（ライチェン他 2006）。以下で述べる4つの要素は、表現の差異は多少あるにしてもすべてそこに含まれている。

理解力

第1の力である理解力、すなわちものごとを深く理解する力には、2つの異質な、しかし相互補完的な側面があると考えられる。一つは、論理を基礎としてものごとを理解すること、あるいは論理的な思考力（logical thinking）ないし理性に基づく理解力である。平たくいえば、「頭で」理解する力、あるいは「堅い」理解方法といえる。

もう一つは、これと対照的に感性を基礎として把握すること、あるいはより大きな視点からの把握力、すなわち直感力、洞察力、判断力、バランス感覚などと表現される理解力である。平たくいえば、「心で」理解する力、あるいは「柔らかい」理解方法といえるであろう。これら2つの一方だけで物事を的確に理解ないし把握することはできず（あるいはすべきでなく）、両方の力量が相まってはじめて深い理解に至ることができる、と筆者は考える。

前者の力を養成するのはもっぱら科学（sciences）であり、自然科学、社会科学、数学、論理学などが含まれる。一方、後者の力量は人文学（humanities）やアート（arts）によって養われる面が大きいといえる。したがって後者には、文字（letters）であらわされた思想あるいは人間に関わる学問領域（人文学）をはじめ、美意識や感性に関わる美学ないし各種芸術、そしてこれら全体に関わる歴史学などが含まれることになる。

以上では、何らかの問題ないし課題がすでに与えられていることを前提して議論したが、現実にはそもそも何が問題になるのかが明確になっていないことも少なくない。その場合には、まず問題ないし課題を発見 (discover) ないし規定 (define) することが必要になる。その場合に必要なのは、論理もさることながら、むしろ鋭い感性 (sense) あるいは感受性 (sensitivity) ではないか。物事の本質は、単に知性 (すなわち論理の世界) だけで見抜くことはできず、感性ないし情緒 (すなわち非論理の世界) が加わることによって初めてそれが見通せるわけである。これは、上述した「心で」理解する方法、ないし「柔らかい」理解方法が不可欠であることを示唆するものである。

米国の多くの大学においては、従来から学部課程を「文理学部」(School of Arts and Sciences) と称している。それは、まさに上記の思想を踏まえたものであり、妥当な名称だと思われる (なお、日本でもかつては文理学部という名称が少なからず存在したが、近年ではそれが解消されてしまったのは残念である)。

伝達力

第 2 の力である伝達力は、第三者 (それは日本人の場合もあれば外国人の場合もある) に対して自分の理解、主張、あるいは感情を各種手段によつて的確に伝える力量のことである。コミュニケーション能力、あるいは説得力といってもよからう。

その一つは表現力であり、そこには文章力 (明快かつ論理的に文章で表現する能力)、発表力 (洗練された日本語によつて口頭発表する能力) が含まれる。そして伝達に際して使用する言語は、国内ではむしろ日本語であるので、「日本語力」すなわち語彙の豊富さ、文法の正確さ、用語の的確さ、文章の明晰さ、無駄のなさ等が教養の基本的条件になる。また相手が外国人である場合には、当該言語ないし現代における実質的な世界共通言語としての「英語力」が明らかに重要になる。

一つの外国語に習熟することは、2つの大きな意味を持っている。なぜなら、ある外国語に習熟すれば、第 1 にそれは当該言語によるコミュニケーションを可能にするからである。そして第 2 に、外国語を知っていれば、日本語による発想との異同を強く意識するので、逆説的ではあるが日本語力を磨くうえでも大きな力になるからである。外国語力の向上は、こうした 2つの意味において教養にとっての大きな意味を持つ。このため、それは教養にとって必須の条件といえる。

ところで、コミュニケーション能力のうち、とくに国際的な場面で求められるその能力には 2つの条件が付く、と考えるべきであろう。第 1 に、論理は万国共通だから論理的に表現する能力が重要であることに何ら疑いはないものの、言語、風俗、習慣などは国により異なるので、それらに関する寛容さないし理解力が、双方向コミュニケーションにおいて不可欠になることである (鈴木 1973)。換言すれば、とくに外国人を相手にコミュニケーションする場合には、ここを通わせることができるかどうか、が深いコミュニケーションを可能にする一つの条件になるといえる。

第 2 に、上記第 1 の条件に関連することでもあるが、自国の文化、伝統、歴史などを最小限身につけており、自己の価値観をしっかりと持っていることである。こうした基盤がなければ「国籍不

明人」となり、国際的な場面では魅力的な人として見られることが少なくなり、ひいては深いコミュニケーションにつながらない懸念があるからである。だから「国際人」の基本的条件は、やや逆説的になるが、自国を熟知していることだ、というのが筆者の考え方である。

向上力

第 3 の力である向上力は、上記の理解力や伝達力などの静態的な力量にさらに磨きをかけることによって、それらを本物にする力量といえる。したがって、向上力は動態的な力ということができ、それを可能とするのは物事を自分で納得するまで考える力であり、「探求力」がその一面を示しているかもしれない。

いずれにせよ、これは自分で積極的に学ぼうとする能力があることを意味しており、知的力量を確実に身につけるだけでなく、同時にそれを一層深める力を意味するものである。教養とは、いわばこうした原動力を自ら備えていることを一つの要件とする、と筆者は考えている。

社会力

第 4 の力である社会力とは、上記の各種力量に比べるとやや漠然としている面があるが、人間として社会で生きていくうえで要請される倫理的基準を幅広く身につけていることである、と考える。平たくいえば、社会の基本ルールを良く理解しており、また相手を思いやる心を持っていることである。すなわち、人間としてふさわしい対応ができる姿勢（倫理的な座標軸）を保持しており、それによって品位が感じられるような力量といってもよからう。

その内容としては、誠実さ (integrity)、克己心 (self-control)、礼儀 (courtesy)、徳 (virtue) などを挙げるができると思う。列挙すれば際限がないが、これらの少なからぬことが日本の武士道精神 (新渡戸 1991) に合致する (藤原 2005) 点は興味深いことである。ただ、これらの資質は一朝一夕に身につくものでなく、また大学教員自身がこれを十分満たしているとも限らない。ただ、だからといって教養の条件からこれらを排除するのは適切といえず、学生が身につけるべき重要な資質であることは変わらない、と筆者は考える。

明治時代の教育家である新渡戸稲造は、「本当の志」を身につけることの大切さを主張、そこでは生命力 (vitality)、精神性 (mentality)、徳性 (morality)、社会性 (sociality) が強調されたとされている。これらは一見古めかしい項目のように感じられるかもしれないが、現代における教養の中身としても妥当する面が少なくないように思う。社会性という表現において、そうした具体的項目をどの程度までカバーすべきかについては大いに議論の余地があるが、上記のことがらはいずれも現代の大学教育において (あるいはむしろ初等中等教育において) 重要な教育目標であることに変わりない、と筆者は考えている。なぜなら、これらの多くは、文化を超えて普遍性を持つ人間としての重要な基準だ、といえるからである。

社会力を広く考えると、その一つとして「規律」 (discipline) がある。規律とは、人が社会生活

を営むうえで必要な行為の基準として定められたきまり、定め、あるいは掟のことである。しつけ(躰)、あるいは礼儀作法もこれに含まれよう。規律に従うことは一見何かを押しつけられることのように見えるが、そうではなく、むしろそれによって自分の行動に自主性が生まれ、結局自分の人格、品格を保つことになる、というのが筆者の理解である。また、自由であることの重要性は誰もが説くが、その前提には規律があってこそ言えることである(池田 1963)。そして、何ごとであれ一定の規律に従うかどうかを適切に判断する力は、普遍性、国際性のある一つの力量だと思う。

大学の中は、世間一般とは異なり何ごととも自由度が大きいので学生諸君はこれになかなか気づかないが、社会に出てからその重要性が分かることが少なくない。規律はその一例のように見える。ちなみに筆者は、学生諸君にその重要性を修得してもらうため、筆者なりの方法を実践している¹。

(6) 4つの力量に関する付言

教養の中身として上記4点を指摘したが、これらに関して2つ付言しておきたい。

第1に、これら4点(理解力、伝達力、向上力、社会力)は、いずれも時代や国を超えて価値を持つと考えられる技量であり、したがって普遍性が高い点からいって大学学部において教養教育の内容とするにふさわしいものだ、といえる。ちなみに、明治初期の思想家・教育者である福澤諭吉は、自身が創設した慶應義塾で学ぶ者および学んだ者は「気品の泉源、知徳の模範」たるべしとしている(福澤 2002)。これは上記4点を全て達成すべき目標としたものと理解できると思う。

第2に、上記4点の力量は、いずれも学生がマニュアル(手引き書)によって簡単に学べるといった性質のものではないことである。いずれのことからも、厳しい勉強を通して初めて身につくものである。勉強は、読んで字のごとくまさに「勉」めることを「強」いる行為だ。つまり講義を聞いたり、書物を読んだり、必要なことを暗記したり、論文を書いたり、口頭発表をしたりするなど

¹ 規律の重要性を理解してもらうため、筆者は次の2つを実践している。第1は、筆者の授業においては履修者が守るべきルールを設定し、それを授業シラバス(の末尾)に次のように明確に記載していることである。

「この授業を受ける場合には次の点に留意すること。(1) 授業中の食事(但し飲み物をのぞく)は社会通念に合致しないだけでなく他の受講者の迷惑になるので認めない。(2) 私語が目立つ者は、他の受講者の迷惑になるので名指しをして退室を命じることがある。(3) 教室内では帽子をとること。」

これらは規律というほどのことでないかも知れないが、授業中に違反者が見つければ筆者は直ちに注意するようにしている。このため、筆者が担当する授業では全履修者がこのルールを遵守してくれるようになっており、幸いにも教室内は常に緊張感が維持できている。学期最後に行われる授業評価アンケート調査の結果をみると「こうしたルールを明記し、実行しているのは清々しいことであり、とても良いと思いました」という回答が寄せられている。

第2は、教室で講義をするに際し筆者は必ずネクタイを着用することを規律として自分に課している。大学というコミュニティの雰囲気は、例えば一般の会社の場合とは異なりかなり自由であり、教員の服装も非常に自由である。それは、何かに縛られるという発想を排し、ものごとを自由に考える環境を維持するうえで大切な面もあるが、とはいえ、やはり程度問題ではないか。例えば、薄汚いジーンズ(Gパン)ないし体操用シャツと運動靴という姿で講義をする教員も時々見かけるが、これは聴講する学生に対して失礼であり、授業環境の緊張を削ぐのではないか。なお、講義開始時に学生諸君に対して毎回一言あいさつをすることも、勉学にふさわしい環境を維持するための筆者なりの一つの工夫である。

の活動を重ねることによって、体で覚えていくほかに道はない。これは、ちょうど自動車の運転に習熟するのと同様である。自動車の運転マニュアルには「加速するにはアクセルを踏み、停車するにはブレーキを踏み」と書いてあるが、それを読んだだけで実際に自動車を安全に運転するのは無理である。やはり、実際に自動車に乗り、ハンドルを握り、自分で車を動かしてみて初めて運転の感覚がつかめ、公道で安全に運転できるようになるのと同じである。3つの要素も体で覚えてゆく以外にはない。

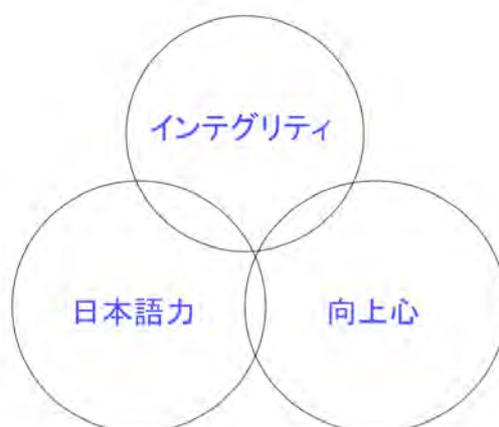
その一方、学生は教員の背中をみて育つという面がある。このため、教える側が学び続けていなければ、学生は本当に学ぶことはできない (McLeery 1986)。その意味で、教員自身も研究活動を通してこれらの資質を率先垂範して身につけること (少なくともそのように努力しようとする姿勢) が求められるのではないか。

2. 学部教育の目標 (1) : 日本語力

以上、大学生が身につけるべきは教養であること、そしてそれを規定するのは4つの知的力量 (理解力、伝達力、向上力、社会力) であることを述べた。ここでは、これら4つのうち、理解力と伝達力は「日本語力」として1つに統合できることに着目したい。そして、社会力はその根幹が「インテグリティ」であることからそれをインテグリティと言い換えることにする。

すると教養は、日本語力、インテグリティ、向上心、この3つを基本要素としており、この3つが大学学部教育の究極的な目標になるべきだ、と整理できる。筆者はそうした理解が可能であることを本稿で主張したい。これら3つは、まさに時代や国を超えて価値を持つ技量であり、教育目標とするにふさわしいことがらである。したがって、これらこそが大学教育の基本である、というのが筆者の論点整理である (図表3)。以下では、この理解をもとにして学部教育のあり方を考えてい。

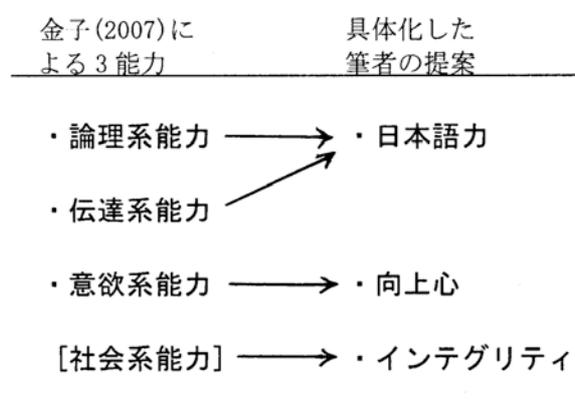
図表3 大学教育の3目標



(注) 筆者作成。

大学教育の目標を上記 3 要素として理解するのが適切であるという意見は著者独自の考え方として従来から述べてきたものであり（岡部 2006、2007b、2009、2011a）、他に全く見当たらなかったが、ごく最近、ある教育学研究者が教養を論理系能力、伝達系能力、意欲系能力の 3 つの基礎能力として指摘していること（金子 2007）を知った。後者の分類を援用するならば「日本語力」は論理系能力と伝達系能力を合成したものであるということができ、また「向上心」は意欲系能力にほかならない。そして「インテグリティ」はいわば社会系能力とすることができる（図表 4）。したがって、筆者が指摘してきた 3 要素は、この研究者による分類を包括する（それをさらに拡充する）ものであるうえ、より具体的な力量として表現している点で一層理解しやすいのではないかと考えている。

図表 4 教養としての基礎能力



(注) 筆者作成。

理解力と伝達力を統合する「日本語力」

前節においては、理解力と伝達力という 2 つの力量を述べたが、この 2 つを統合した 1 つの具体的な能力がある。それは、ことばを適切に使う力、すなわち日本人であるわれわれにとっては日本語を適切かつ縦横に使う力、つまり「日本語力」である。

何ごとによらず、ものごとを正確に理解しそれを第三者に伝えるのは、すべて「ことば」という手段に依る以外にない。したがって日本語力は、教養の総合的水準を示す一つの力になる。学生諸君の中には「日本人だから日本語は当然できる」、あるいは「日本語の上手か下手かということはいささか問題にはならないのではないか」という風に考える向きがあるかも知れない。確かにわれわれは毎日、ほとんど意識することなく、みな日本語の中にどっぷり浸かって生活をしており、このため日本語についてわざわざその力量を考えることはないかもしれない。しかし、日本人だからといって誰でも日本語が上手であるとは限らない、と著者は考えている。

家族間あるいは友人間でのコミュニケーションにおいてはあまり問題になることがないかもしれないが、ビジネスにおける各種の折衝、各種公式場面での対応、組織の内外における多様なコミュニケーション、あるいは外国人相手の（日本語あるいは英語等での）対話などにおいて最も基礎と

なるのは日本語力にほかならない。すなわち、日本語を読む力、日本語の文章を書く力、日本語で口頭表現する力、これらを総合した力が日本語力である。これは、日本人として最も基本的な能力である。

より具体的かつ正確に言えば、日本語力とは、明晰さ (clarity)、正確さ (precision)、効率性 (efficiency)、そして品位 (decency) を持った日本語で表現する力量だ、と筆者は考えている。つまり (1) 言おうとすることが明確であり正確に理解してもらえるように表現できること、(2) 言おうとすることを必要最小限の言葉を使って (言葉に無駄がなく) いえること、そして (3) 言おうとすることが品位を持った日本語で表わせること、この3つを充足することである。

なかなか難しいことであるが、これこそが究極的かつ総合的な教養の一側面であり、学部教育の目標の一つだと考える。つまり、母語 (mother tongue) の素養こそが教養にとって最も基本的な条件であり「言葉は教養のバロメーターである」と言ってよいのではないかと考えている。ちなみに、アメリカの大学生の場合、指導教授から教わった最も重要なことの一つは教員が言葉 (英語) を正確に使用する姿勢であった、という報告 (Light 2004) がある。

日本語力を磨く理由

日本語力を磨くこと、すなわち明晰な、正確な、効率的な、そして美しい日本語が使用できるようになることは、なぜ必要なのか。

第1に、上述したことであるが、論理力を鍛えてそれを自分自身のものにするうえでは、ことばが非常に大きな役割を持つからである。人間の思考や表現においてことばがいかに大きな役割を持ち、それが不可欠であるかは従来から知られている (ハヤカワ 1985)。このため、筋道の通った考え方ができ、その内容を話したり討論したりするには、日本語が最も基礎になるからである。

第2に、それは国際的に通用する力量であり、このためその力を涵養することが国際的な場面でも必要だからである。国際的な活躍 (あるいは国際ビジネス) においては、一般に英語が不可欠であるとされているが、実はそれよりも根本には日本語の力が必要なのだ。明晰な日本語が話せないのに、英語が上手に (説得性のある話し方で) 話せることはありえない、と筆者は考えている。つまり、逆説的ではあるが、英語が上手になるには、まず日本語が上手になる必要がある、と認識している。

上述したアメリカの大学生に関する調査結果 (Light 2004) の場合、論文や討議においてどのような用語を選んで使うかによって分析の深さに差異がもたらされるとともに思考を明確化できる、このことを学生は教員から学んだと述懐している。

日本語力の向上に向けて

なお、日本語力の重要性をこのように認識する以上、筆者は当然、それを教育現場で実践している。とくに、学生諸君と最も密接かつ継続的な接触を持つゼミナール (演習) において、筆者は日

本語の話し方、書き方に厳格なルールを幾つか設定し、それを遵守するよう口酸っぱく言っている。

詳細は省くが、例えば「しゃべる言葉は文章として完結させよ」である。発言する場合には、語尾が必ず「・・・です。」「・・・ます。」など「。」で終ることを要請し、そうになっていない場合には言い直させている。また文末が「・・・けれども。」「・・・とか。」によって終わる責任回避的な口頭表現、あるいは「・・・のほうは・・・」といった不必要な曖昧化を含んだ表現、さらには「あの人の服装は超ダサイ」といった下品な表現は、少なくとも教室における議論においては回避させ、正確な日本語、そして知性や品性が疑われることのないような用語によって議論や対話をするよう、学生諸君を指導している。

以上は日本語を話す場合についてであるが、書く場合についても同様であり、幾つかのポイントがある。そのうち最も重要なのは「論文やレポートではその『構造』を重視すること」である。口頭による発表の場合であれ、書面によって報告する場合であれ、一つの大きな事柄を的確に伝達するうえでは、その構造（各項目が全体としてどう成り立っているか）を明確化することが肝要である。色々な事柄を十分整理しないまま話し相手や聴衆（あるいは読者）に提示しても、受け取る側に対して整理するための心理的負担を強いるだけであり、「よく分かった、納得した」という感想をもってもらうことは期待できない。

このために必要なのは、すべての項目につきそれぞれの階層（levels of hierarchy）に位置することなのかを常に意識し、それを明示しつつ論述や発表を進めることである（岡部 2012a）。このことは、論文の場合であれ、最近よく使われるプレゼンテーション用のソフトウェア（パワーポイント）を使って説明する場合（岡部 2012b）であれ、基本的に同じである。

3. 学部教育の目標（2）：インテグリティ

大学の学部教育において目標とすべき 2 つ目は、インテグリティ（integrity）である。これは、一言でいえば正直さ、誠実さであり、人が社会生活を円滑に営む力と密接に関連している。本稿で強調する学部教育 3 目標のうち、日本語力と向上心は比較的分かり易いものだが、インテグリティという表現は日本では未だ一般化していない。しかし、これは普遍性と国際性を持つ重要な概念であり、大学教育が目指すべき目標であることを本稿ではとくに強調したい。

以下では、インテグリティとは何か、なぜそれが社会力の基本になるのかを明らかにする。次いで、筆者が米国の名門プリンストン大学において教壇に立った経験をふまえ、そこにおけるインテグリティを重視した一つの教育システムを紹介し、最後にインテグリティを重視する意味をその重要性和普遍性という点から評価したい。

インテグリティとその意義

教養の要素の 1 つとして「社会力」、すなわち社会生活を営む力を指摘した。いうまでもなく社会は、人間一人で成り立つのではなく大勢の人によって構成され、一定の秩序のもとに機能する人間

の集団である。したがって、社会生活に欠かせない要素は多々あるが、そのうちでも筆者は個人のインテグリティ、すなわち正直さ、誠実さ、が最も基本になると考えている。インテグリティという言葉は必ずしも日常頻繁に耳にする言葉でないかもしれないが、本稿では、あえて社会力をインテグリティと言い換えたうえで、その重要性を強調したい。

インテグリティとは、語源的には「言うことと行うことが一致していること」である。つまり言行一致であり、両者が一体化しているという意味で完全性を意味している。

われわれは、口では良いことを言っても実際の行動がそうになっていない場合が少なくないが、そうではなく両者が一致していること、それがインテグリティである。そして重要なのは、他人が見ていようが見ていまいがその姿勢が貫かれていることだ。人が見ている場面では言行が一致していても、人が見ていないところではそうでないケースがありがちだが、そうではなく人の目が届かないところでも言うことと行うことが一致していること（陰ひなたのない行動ができること）、これがインテグリティの重要な側面である。インテグリティという言葉が、完全性（integer）を語源としているのもうなずけるところである。

インテグリティは、社会を構成する個人にとって最も重要な倫理的基準のひとつであり、それが行き渡っているならば、個人も組織も信頼性が高くなるので良い社会だといえる。ただ、率直に言えば、筆者自身、自分の行動が人の目が届かないところでも常に口でいうことと当初から一致していたかどうかと問われるならば、いつもそうだったとは必ずしもいう自信はなく、また初めからインテグリティの重要性が十分理解できていたという訳でもない。

しかし、約20年前、米国プリンストン大学で1年間教壇に立った時に同大学の教育システムを知り、インテグリティという言葉とその意味の深さを理解するとともに、同大学でその重要性を教育の根幹に据えていることを知って、筆者は強い衝撃を受けた。プリンストンは、アメリカの全大学のなかでハーバードと常にトップ争いをしている名門大学である（ノーベル賞受賞者を20人以上出している）が、研究面だけでなく教育面で非常に力を注いでいるのが大きな特徴である。そして教育においては、インテグリティの重要性を学生に体得してもらう制度を古くから確立している点で非常にユニークな大学とされている。

プリンストン大学におけるインテグリティ重視の教育システム

つまり、プリンストン大学の期末試験においては、驚くべきことに試験監督を置かずに試験を実施している！ 期末テストの際、教員は試験問題と解答用紙（ブルーブックと称される青表紙の10ページ余りのノート冊子）を試験教室で配布し、自分の研究室に帰る。そして試験時間（2時間程度）の終了を見はからって、再び教室に現れて答案を回収し、それを持ち帰るのである。

つまり、全ての期末試験は学生の正直さ（honesty）を前提として実施されており、このため試験監督が誰もいない状態で試験が進行するわけだ。こうした対応によって試験を公明正大に行うため、学生は「不正行為をしていないことを私の名誉にかけて誓います」（つまり不正行為は一切していな

い) という誓約文を答案に自筆で書いて署名することになっている (違反者には当然重い罰則が適用される)。このため、このシステムは「名誉ある宣誓制度 (honor system)」と称されており、約 100 年前にウッドロー・ウイルソン同大学総長 (後に米国大統領) によって導入されて以来、同大学が誇りにする制度になっている。なお、この制度の詳細とその機能は別途書いた (岡部 2006 : 1 章)、それを参照されたい。

ここでは、不正は人格を損なうという考え方、あるいは社会のリーダーになる者は誠実性、正直さが不可欠の条件であることが強調されており、現に教育現場において学生がそれを身につけるような制度的対応がなされている。この制度は、プリンストン大学の高い精神性を示す高貴な伝統的制度だと同大学関係者は評価している。すばらしい理念とそれをふまえた勇気あるシステムであり、率直に言って筆者はこれを羨ましく感じる。

インテグリティを重視する理由

なぜインテグリティがこのように重視されるのか。それは第 1 に、インテグリティを基本原則に据えた生活をするならば、どのような状況にも安心して対応でき、何も言い訳をする必要がないからである。もし、ものごとに関して正直でないならば、それは一つの秘密を自分自身が抱えることを意味しており、このためそれは自分の気持ちの上に重荷となつてのしかかってくる。しかし、常に正直を旨としており、それをもとに決定をくだすという態度をとるならば、他人にどのような言いわけをするかといった不安な気持ちを抱く必要はなくなる。

このため、対応すべき問題の性質が曖昧になったり、あるいは周囲を当惑させるような決定をする懸念がなくなるので、それは結局「良い判断」を可能にする。インテグリティを生活の基準におけば、自分の心の落ち着き (serenity) が得られるばかりか、このように、下さねばならない判断や決定もよりの確なものになるわけである。逆にいえば、インテグリティの欠如 (ウソをつくこと) は自分自身の信用や価値をおとしめるだけでなく、何かにつけ言い訳を考える必要に迫られるので良い判断をすることができなくなってしまう、何の得にもならないわけだ。

第 2 に、インテグリティは責任を持って行動することを意味しているので、第三者からの信頼感が高まる。これは、自分にとって喜びになる。

第 3 に、インテグリティを生活の基準におけば、込み入った日々の生活を単純化できるというメリットもある。それは毎日の生活に自信をもたらしてくれることになる。

インテグリティの重要性と普遍性

さらに、インテグリティは国際性、普遍性のある価値であることも知っておくのがよからう。例えば、代表的な国際機関である国際連合では、組織としての 3 つの基本的価値を掲げているが、その一つとしてインテグリティがうたわれている。すなわち、国連における 3 つの価値とは、専門的能力 (professionalism)、誠実さ (integrity)、そして多様性の尊重 (respect for diversity) で

あり、国連の幹部職員を全世界から公募する場合、この3つを充足する人であることを強調しているのが印象的である。

もう一つ例を挙げておくと、幕末から明治にかけての時代先導者であり慶應義塾の創始者でもあった福澤諭吉のケースがある。彼は、自分の息子2人に対する徳育にたいへん心を砕いていたことが知られており、子供たちが家庭で学ぶべきことを「ひびのおしえ」として書きつけた小冊子（福沢 2006）が残っており、その7項目の第1番目に「うそをつかないこと」を挙げている。

さらに、以上では個人の場合（personal integrity）について述べたが、実はそれ以外にも職業上のインテグリティ（professional integrity）、組織のインテグリティ（organizational integrity）など、様々な場合にもこれは重要な意味を持つ行動規範である（Montefiore and Vines 1999）。社会の性格や時代を問わず、普遍性のある概念なのだ。

学生諸君は、多くの場合、今後何らかの組織とくに会社（企業）で働くことになる場合が多いので、ここで企業のインテグリティについて言及しておきたい。筆者が会社について最近強調していることであるが（岡部 2007a、11章）、企業の経営においては、社会が必要とする財やサービスを効率的に供給すること、自己責任の原則に基づいて行うこと、そして正直かつ誠実（integrity）なやり方で行うこと、この3つを満たす対応が基本的に重要である。

これらを満たさない経営、とくにインテグリティを欠いた企業経営をすれば、多くの問題を引き起こす可能性が高く、場合によっては企業の存立すら危うくするリスクを伴うことになる。例えば、インテグリティを欠いた企業経営の事例として最近幾つかの食料品関連の会社があった。その会社は、信頼の置かれた老舗であったにもかかわらず（あるいはそれを良いことにして）製造日や消費期限の不正表示をしたうえ、消費期限切れの商品を回収して再販売するなど、消費者を欺く行為を行っていたことが発覚した。その結果、営業の一時停止や信頼失墜など大きなダメージを受けることになった。これに類似した行動をとった別の会社では、顧客の信用失墜によって営業が成り立たなくなり、廃業に追い込まれた。

このほかにも、建築事務所による耐震強度偽装、自動車会社のリコール隠し、総会屋への不正利益供与、銀行の不良債権の隠ぺい、輸入牛肉偽造による公金の搾取、巨額の損失隠蔽など、日本では近年あらゆる業界で不祥事が発覚し、これまで新聞を賑わしてきた。こうした行動をとった会社は、それによって経営危機に陥るとか、場合によっては廃業せざるを得ないという状況に追い込まれている。インテグリティの欠如は非常にリスクが大きく、会社にとって結局著しく高くつく（命取りになる）わけである。

こうした出来事をなくすには、まず社員全員が個人としてインテグリティを十分意識していることが重要であり、それが出発点になる。そのうえで組織のインテグリティを強化することが大切だ。つまり、企業としては自己責任の経営を正直かつ誠実なやり方で行なうことにほかならない。経営者は、時間やエネルギーを先ずこれらの点にこそ集中させるべきであり、そうした努力をすれば、結果として企業の長期的利益と長期的にみた株価を増大させることになるだろう。

筆者の場合、学生に課題レポートを課す際には、依拠した文献を全部明示することを強調するとともに、無断引用など不正がない旨をレポートの表紙下方に書かせて署名させることにしている。これは、学問上のインテグリティ (academic integrity) を満たしてもらうとともに、それを通じて学生個人としてのインテグリティを本当に自分のものにしてもらうためである。また授業中に即答できないような質問が学生から出た場合、もし十分に答えられないような場合には、その旨を率直に述べるとともに自分が納得するまで調べたうえで回答するようにしている。これらはほんの小さい実践にすぎないが、インテグリティがいかに重要かを色々な対応をすることによって学生諸君に確信してもらいたいための筆者なりの対応である。

古来「正直は最善の策」といわれているが、それよりも広義にインテグリティという意味でそれをとらえた場合、この格言は妥当性が一層高まるように思う。インテグリティは、それ自体が大きな価値を持つだけでなく、それを目指した生活をすれば心の重荷が軽減され、自信も湧いてくる。これは筆者が経験的に学びその真実を確信していることであり、そして学生諸君に伝えたいメッセージである。

4. 学部教育の目標 (3) : 向上心

大学の学部教育における第 3 目標は、向上心、すなわち自分を常に高めようとする姿勢ないし力を学生に育ませることである。理解力と伝達力が特定時点における静態的な力量を示すのに対して、向上心は、時間とともに自分の力を高める能力を意味しており、教養の動的な側面に関する力量といえる。

したがって、仮に現時点におけるその他の力量 (日本語力、インテグリティ) が不十分であるとしても、もし学生時代に十分な向上心が育まれるならば、長期的には大きな希望が持てることになる。だから、向上心を学生時代に身につけることができれば、それは一生の財産になる。ただ、それは必ずしも容易なことでないかもしれない。なぜなら、そのためには学生自身の努力が必要であるだけでなく「学生は教員の背中を見て育つ」ので、良い大学教員に巡り会うことがどうしても欠かせないからである。

したがって、学生の向上心の涵養においては、学生がとるべき態度もさることながら、むしろ大学教員が心がけるべき態度も重要になる。学生の向上心を育む上では、(1) 教員が学生の良い点を積極的に見つけて褒めること、(2) 教員がその道の「本物」(の研究者) でなければならないこと、(3) 教員が自己研鑽ないし研究活動へ打ち込んでいること (少なくとも精一杯その努力をしていること)、などが前提になる。ここではこれらの点を指摘するにとどめ、その詳細は別稿 (岡部 2013) に譲る。

結語

大学教育においては、学生に対して高等な知識を教授することが先ず必要である。しかし、知識は必然的に陳腐化するので、本当に大切なのは永続性と普遍性のある価値観や知的スキルであり、

それらこそが学生の将来に役立つものとなる。そうした力量として日本語力、インテグリティ、向上心の3つがとりわけ重要である。そして学生がそれらを身につけるうえでは、教員の絶え間ない研究活動と自己研鑽が不可欠の条件になる。結局、大学は学生と教員がお互いに成長する場所である。

[引用文献]

池田 潔 (1963) 『自由と規律—イギリスの学校生活—』 岩波新書、岩波書店。

猪木武徳 (2009) 『大学の反省』 NTT出版。

岡部光明 (2006) 『私の大学教育論』 慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2007a) 『日本企業とM&A—変貌する金融システムとその評価—』 東洋経済新報社。

岡部光明 (2007b) 『日本経済と私とSFC—これまでの歩みとメッセージ—』 (慶應義塾大学最終講義) 慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2009) 『大学生へのメッセージ—遠く望んで道を拓こう—』 (日本図書館協会選定図書) 慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2011a) 『大学院生へのメッセージ—未来創造への挑戦—』 慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2012a) 「研究活動と研究論文—修士論文を中心に—」、明治学院大学『国際学研究』41号。
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2011.html>

岡部光明 (2012b) 「効果的なパワーポイント・プレゼンテーション—理論的基礎と実践的提案—」、明治学院大学『国際学研究』41号。 <http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2011.html>

岡部光明 (2013) 『大学でほんとうに学ぶべきこと—ぶれない価値観と知的スキル—』 出版社未定。

金子元久 (2007) 『大学の教育力—何を教え、学ぶか—』 ちくま新書 679、筑摩書房。

川本卓史 (2001) 『なぜアメリカの大学は一流なのか—キャンパスを巡る旅—』 丸善ブックス。

経済産業省 (2006) 「社会人基礎力に関する研究会」中間取りまとめ報告書。

鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波新書C98、岩波書店。

新渡戸稲造 (1991) 『武士道』 (矢内原忠雄訳) ワイド版岩波文庫 35。[原書 Bushido, The Soul of Japan, 1899]。

ハヤカワ、S. I. (1985) 『思考と行動における言語』 原書第4版 (大久保忠利訳) 岩波書店。

福澤諭吉 (2002) 『福澤諭吉著作集 第5巻 学問の独立 慶應義塾之記』 慶應義塾大学出版会。

福沢諭吉 (2006) 『童蒙おしえ草 ひびのおしえ』 岩崎弘訳・解説、慶應義塾大学出版会。

文部科学省 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申。

藤原正彦 (2005) 『国家の品格』 新潮新書、新潮社。

ライチェン、ドミニク S., ローラ H. サルガニック (編著) (2006) 『キー・コンピテンシー——国際標準の学力をめざして——』 立田慶裕監訳、明石書店。(D.S. Rychen and L.H. Salganick (eds.) Key Competencies for Successful Life and a Well-functioning Society, Hogrefe Publishing, 2003.)

Light, Richard J (2004) Making the Most of College: Students Speak Their Minds, Harvard University Press.

McLeery, William (1986) Conversations on the Character of Princeton, Princeton University Press.

Montefiore, Alan, and David Vines, ed. (1999) Integrity in the Public and Private Domains, London and New York: Routledge.